

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320067

研究課題名(和文) 語りの経験ともの語りの修辞学

研究課題名(英文) Narrative Experiences and the Rhetoric of Narrative Performance

研究代表者

菅原 克也 (SUGAWARA, Katsuya)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：30171135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：文学作品を模範例に、人間の経験が「語り」というものに編成されるにあたって、いかなる形式をとるかを、物語論の枠組みにおいて、語りの修辞という面から考察する際に、どのような用語法にしたがって記述できるのかを、具体的に検証することができた。一人称語りの特徴と、語りにおける聞き手の重要性などが再確認され、「読者論」に接続する「聞き手論」の構想の地平を開くことができた。対象となったのは、日本近代文学、中国近代文学、をはじめ、日本や朝鮮を語る学術的研究における「語り」のスタイルなどにも踏み込むことができた。

研究成果の概要(英文)：With Literary texts as presumed templates, the ways how the narrative discourse of human experiences are rendered were systematically assessed, taking into consideration a wide variety narrative theories and the discussions of narrative rhetoric. Revision of terminology in the domain of narratology was extensively conducted. The characteristics of the first-person narrative were recognized and the importance of narratee in the narrative communicative was appreciated in terms of the "readership theory," indicating a possibility of construction of the theory of narratee. The target field of research was the modern Japanese literature and modern Chinese literature, as well as the narratives of academic discourse on Korea and Japan.

研究分野：人文学

キーワード：比較文学 物語論 語り 語りの修辞

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の文学研究において、「語り」に関する理論的究明が組織的に行われていないという現状認識があった。文学研究を出発点に、人間の経験がいかに「語り」として組織されるのかという点を、語りの形態に関する修辞学的な考察を含めて行うことが重要な課題として認識された。

(2) 欧米における物語論、物語理論等は2000年代に入ってから、次第に大きな影響力を奮うようになっていたが、1990年代までの日本における欧米の理論の摂取状況に比べて、2000年代以降の理論の取り込みは不十分であると認識された。

(3) 以上(1)と(2)に述べた状況に鑑みて、日本において、日本語による物語論の構築が求められるとの認識があった。

2. 研究の目的

(1) 人間の経験を理解するにあたっては、経験は「語り」として編成されるのだという観点が重要であると考えられる。「語り」としての編成にはどのような要素が介在し、それはいかなる形式を持つのかについて、具体的に明らかにすることが目的となった。

(2) 日本における物語論の理論的研究の進展を促すためにも、日本語で書かれたテキストに関する、日本語の用語法による分析を行うことが第二の目的となった。

(3) 日本語による言説をより広い視野で考察するために、近代における東アジアの歴史的文脈を考慮した研究を行うことが第三の目的となった。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者と分担者が「語り」の理論に関する研究会を組織し、議論を行う過程で、新たな知見を開いた。

(2) 「語り」に関する理論書、研究書の収集、集積に心がけ、今後の研究の基盤を資料として残すことを心がけた。

4. 研究成果

(1) 最も大きな成果は、研究代表者が2016年に東京大学出版会から刊行予定の『小説の語り』に集約される知見である。これは、欧米の物語論(narratology)、物語理論(narrative theory)等において定着しつつある理論的枠組み、分析方法、用語法等に学びつつ、これを日本語の文脈において新たに練り直したものである。

分析のための用語を翻訳語に頼ることなく、日本語として意味の通じる、日本語による思考に耐える用語法を工夫し、かつ用例もほとんどを日本近代文学から採取した。これにより、日本語による日本の文学作品を日本語の用語法による理論的分析に委ねることが可能となった。今後の文学研究への寄与も大きいと自負する。

内容の概略を記せば、第一章「語りの相(Aspect)」、第二章「語りのレベル」、第三章「語りの視点」、第四章「語りの声」、第五章「語りの時間」という構成をとり、語りについて理論的に考察すべき主要なトピックをほぼ網羅した。とくに「内容」と「形式」という二分法で論じられていた語りの相について、物語内容、物語言説、物語行為の三つの相を考察すべきこと、またそれぞれが具的なテキストにおいて、どのように区別されるのかを明確にしえた点は、研究上の大きな前進であった。

また、引例にあたっては日本近代文学の代表的な作品を取りあげることに心がけた。具体的には、夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、永井荷風、太宰治らの作品から多数を引用し、その上で細やかなテキスト分析を施すことで、議論の理解を容易ならしめるよう心がけた。

(2) 研究代表者、研究分担者で、各専門分野での関心に沿って、「語り」の観点からの研究を行った。

菅原克也は、日本近代文学の小説と詩における語りを広く文学一般の視野から分析する方策を探り実践した。

劉岸偉は、中国近代史、近代文学において重要な位置を占める周作人について、伝記的な研究を深化させるとともに、テキストにみられる語りの特徴について実証的な研究を継続した。

李建志は、韓国近代文学の中心に「苦難の語り」の実相とその倫理について、また日常生活の語りについて幅広く研究を推進した。

(3) 本研究課題の遂行のため、以下の国際研究会を企画・開催した。

国際コロキウム「比較文学の未来」(The Future of Comparative Literature) 2013年11月29日、東京大学駒場キャンパス
このコロキウムには ICLA (国際比較文学会) 会長ハンス・ベルテンス氏(コトレヒト大学教授)と、元 ICLA 会長ユージン・オーヤン氏(インディアナ大学教授)を招き、日本側からは大嶋仁福岡大学教授、橋本順光大阪大学教授、山中由里子国立民族学博物館准教授、上垣外憲一大妻女子大教授、佐藤光東京大学教授が参加して、苦難の語り、異郷の語り、驚異の語り等について、討議を行った。

日韓学術交流シンポジウム「日本を語

る、韓国を語る」、2014年12月5日、東京大学駒場キャンパス

このシンポジウムには韓国外国語大学から朴容九氏、姜素英氏、崔在喆氏、徐戴坤氏らを招き、東京大学からは佐藤光、前島志保、徳盛誠が参加し、日本と韓国に関する政治、文化、歴史をめぐる語りのあり方を巡って討議を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

菅原克也、一人称語りと聞き手 夏目漱石『坊っちゃん』とR.L.スティーヴンソン『ファレサアの浜』、比較文学研究、査読有、100号、2015、119 - 147.

菅原克也、ことばの風景 萩原朔太郎『春の実體』を読む、比較文学研究、査読有、98号、2013、49 - 68.

菅原克也、体験への畏れ、比較文学・文化論集、査読無、29号、2013、47 - 51

李建志、一九三〇年代の朝鮮文壇 なぜ金来成ひとりが朝鮮探偵小説を体現したか、関西学院大学先端社会研究所紀要、査読無、9巻、2013、33 - 48.

李建志、韓国映画の中の北朝鮮 北朝鮮表象から見えてくるもの、地域研究(京都大学地域研究総合情報センター)、査読無、13巻2号、2013、238 - 243

[学会発表](計11件)

劉岸偉、非母語で書くことの意味を考える、東工大清華大合同シンポジウム、2015.12.5、東京工業大学(東京都目黒区)

菅原克也、批判の根拠とテキスト解釈 H.D.ハルトゥニアンンの柳田國男論、日韓学術交流シンポジウム「日本を語る、韓国を語る」、2014.12.5、東京大学(東京都目黒区)

李建志、李王垠と美術 李王家美術館から見えてくるもの、日韓学術交流シンポジウム「日本を語る、韓国を語る」、2014.12.5、東京大学(東京都目黒区)

李建志、娯楽映画のなかの排除と包摂から見えてくるもの 昭和のメディアミクス、2014.3.8、先端社会研究所全体研究会、関西学院大学(兵庫県西宮市)

劉岸偉、アーサー・ウェイリーによる東洋さ古典の翻訳について、東工大清華大合同

シンポジウム、2013.11.16、東京工業大学(東京都目黒区)

李建志、日本のなかのパラオ 帰還者たちの開拓村、関西学院大学先端社会研究所シンポジウム「二世 戦後において引揚者、復員者、在日朝鮮人の子供達はなにを聞きなにを引き継いだか」、2013.3.19、関西学院大学(兵庫県西宮市)

劉岸偉、一九三四年周作人の日本再訪とその周辺、大手前大学交流文化研究所国際シンポジウム「1930年代東アジア文化交流の研究」、2012.10.12、大手前大学(兵庫県西宮市)

李建志、ピラミッド高しといえども 平壤高等普通学校時代の金史良、大手前大学交流文化研究所国際シンポジウム「1930年代東アジア文化交流の研究」、2012.10.12、大手前大学(兵庫県西宮市)

劉岸偉、石川啄木詩歌の中国語訳、東工大清華大合同シンポジウム、2012.9.14、清華大学(中国・北京市)

李建志、京都じゃっかどふに記録、関西学院大学・雲南社会科学院共同研究会「雲南災害の社会表象 災害の実態・村落の軌跡・表象」、2012.8.20、雲南社会科学院(中国・昆明市)

[図書](計4件)

菅原克也、小説の語りについて 夏目漱石『坊っちゃん』を読む、東京大学出版会、東京大学教養学部編、高校生のための東大授業ライブ 学問への招待、2015、60 - 73

李建志、京都で町屋に住むということ、関西学院大学出版会、斎藤由紀編、京都の町屋を再生する 家づくりから見えてくる日本の文化破壊と文化継承、2015、15 - 50

劉岸偉、1934年周作人の日本再訪とその周辺、思文閣出版、上垣外憲一編、1930年代東アジアの文化交流、2014、81 - 92

劉岸偉、東洋近代知識人の二種の選択、ミネルヴァ書房、稲賀繁美編、東洋意識 夢想と現実のあいだ 1887 - 1953、2012、596

[その他]

国際コロキアム「比較文学の未来」(The Future of Comparative Literature)のホームページ

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/symposium/sympo/international%20colloquium%20013/index.html>

日韓学術交流シンポジウム「日本を語る、
韓国を語る」のホームページ

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/symposium/sympo/korea3/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原克也 (SUGAWARA, Katsuya)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30171135

(2) 研究分担者

劉岸偉 (LIU, Anwei)
東京工業大学・外国語研究教育センター・教授
研究者番号：30230874

(3) 連携研究者

李建志 (LI, Kenji)
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：70329978